

国境に架ける橋：稚内とサハリンを旅して

北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター助教
後藤正憲

旅行者は国境観光に何を求め、そこから何を得られるだろう。それは、世界の輪郭を肌で感じることで、普段は見過ごしていた現実を捉え直し、新たな自分を発見すること、また自分を取り巻く現実と決着をつけ、さらに先へ進むための力を養うことではないかと思う。この度日本とロシアの国境を旅して、まるで実験的な映画で空想と現実を行き来する場面のように、煙やモザイク状の無定形なものから徐々に形が現れ、やがてはっきりとした個別の対象が浮かび上がるような、そんな感覚にしばしばとらわれた。

9月7日の稚内平和マラソン大会にエントリーした妻と私は、前日の正午過ぎに稚内入りして、まず日本の最北端である宗谷岬へと向かった。岬の先端に立つ〈日本最北端の地の碑〉から、少し小高い丘を上ったところに、巨大な折り鶴をかたどった〈祈りの塔〉がある。1983年9月に起きた大韓航空機撃墜事件の犠牲者の霊を慰めるために立てられたモニュメントだ。眼下に宗谷海峡を見渡せる高台で、鶴は旅客機の撃墜されたサハリン沖の方角に向かって、今にも羽ばたこうとしているかのように見える。



宗谷岬からサハリンの島影を探す。奥の建物は旧海軍望楼

ペレストロイカ以前のソ連領空で起きたこの事件のことを、実は私はあまりよく覚えていない。あるいは、サッカーに夢中だった中学2年生の私にも、事件を伝える新聞の大きな見出しが視界の隅に映っていたかもしれない。しかし、この日までほとんどそれを意識することなく過ごして

きた。稚内市のシンボルともいえる〈開基百年記念塔〉の中にも、この事件についての特別コーナーが設けられている。一面で大きく事件を伝える当時の新聞や、稚内の海岸に漂着した様々な遺品の写真が展示されたコーナーの前に立つと、事件の生々しさとともに重く緊張した空気がありありと伝わってきて、思わず背筋がひやりとした。

稚内平和マラソン大会は、この事件の犠牲者の霊を慰め、皆が一つのスポーツに打ち込むことで世界の平和を祈願することを目的として始められたイベントで、今年で記念すべき 30 回目を迎える。冷戦が終結して四半世紀たつ今日でも、開会式の会場には千羽鶴が飾られ、大会に込められた思いが大切に守られていた。私の出場した 8 キロのコースは、稚内市役所前をスタートしてノシャップ岬の外縁沿いの道路を走り、岬の反対側にある競技場でゴールとなっている。途中の道は平坦で、当日は風もそれほど強くなく、天候は穏やかに晴れていた。環境としては申し分なかったのだが、私は事前の準備不足がたたって、スタートして間もなく息があがってしまい、最後までペースがつかめなかった。一般女子 5 キロの部で入賞した妻には頭が上がらない。ともあれ、立派な大会を準備された方々、また沿道で温かい声援を送っていただいた方々に、この場を借りてお礼申し上げたい。

樺太がソ連軍に占領され、日本がポツダム宣言を受諾することによって、日露国境の街となった稚内には、〈祈りの塔〉の他にも国境にまつわるモニュメントがたくさんある。〈開基百年記念塔〉と同じ稚内公園内には、樺太島民の苦悩を表す彫刻の慰霊碑〈氷雪の門〉が立っている。また北防波堤ドーム脇には、1923 年に稚内と大泊（コルサコフ）を結んで開通し、1945 年に閉ざされた定期航路を偲んで立てられた〈稚泊連絡航路記念碑〉が見つかるだろう。いずれも戦争の悲しい遺産だ。一方、1998 年にこの定期航路は再開され、今日ではハートランドフェリーの船が一週間に 2 往復運行している。



ハートランドフェリー「アインス宗谷」にいざ乗船

マラソン大会の翌日、私たちは胸をわくわくさせながら〈アインズ宗谷〉に乗り込んだ。船の乗客はロシア人が過半数を占めていた。中にはビジネス帰りのような人もいるが、おそらくほとんどが観光客だろう。日本人の中には、自転車で旅行する若い人たちもいる。九州からバイクに乗って来たという大学生もいた。船が宗谷海峡の真ん中を通過した時にアナウンスが流れ、売店で「国境通過証明書」がもらえるようになっているのも嬉しい。5時間半の後、船は曇った空に荷揚げ用のクレーンが並ぶコルサコフ港に入港した。入国手続きでは思ったほど時間がかからず、わりとすぐにフェリーターミナルの外に出ることができた。しばらく歩いて乗り合いタクシーを拾ったが、他に乗客のいない車の運転手は、こちらがひやひやするほどのスピードで車を飛ばし、あっという間にユジノサハリンスクに到着した。

宇宙飛行士の名のついたガガーリン公園の一角にあるホテルに宿をとり、翌日からはいよいよサハリン観光。目抜き通りのコミュニスト大通りにある、日本時代の建築で有名なサハリン州立郷土博物館は外せない[この建物を始め、サハリンに残る日本の建築物については、井潤裕著『サハリンのなかの日本』(東洋書店、2007年)に詳しい]。さらに、鉄道駅近くの鉄道博物館を訪れる。今回の渡航に先立って、サハリンに行くなら鉄道を見てきてほしいとO氏に頼まれていた。そこでできるだけ移動に鉄道を使いたいと思っていたのだが、当地ではバスや乗合タクシーの普及とともに、鉄道路線の廃線や縮小が進んでいて、なかなか思うようにそのチャンスがない。そこでせめてもと、鉄道博物館に行ってみたのだ。

サハリンの鉄道は、線路や駅、トンネルの多くが日本時代に作られたもので、戦後ソ連になってからも長く日本の機関車や車両が使われていた。博物館に併設された屋外の展示スペースには、戦後サハリンの交通を支えた日本の車両が多く保存されている。私たちを案内してくれた鉄道職員のアンドレイは、そうした車両の一つ一つについて丁寧に解説してくれた。こぢんまりとした博物館の建物内部には、日本時代から今日に至るまで鉄道の歴史を物語る写真と資料が所狭しと並べられ、それは見ごたえのあるものだった。このように大変な維持費と労力のかかりそうなことが、職員たちの情熱によって支えられていることに、何より心打たれた。



サハリン鉄道職員アンドレイと筆者。
後ろは除雪車ワジマ（昭和17年苗穂工場製）



鉄道博物館の地図

鉄道の展示は、私たちを宮沢賢治の旅へと誘うものでもある。先に触れた稚泊連絡航路が開通

した 1923 年 8 月、賢治は連絡船に乗って樺太を訪れ、オホーツク海沿岸の栄浜（スタロドゥップスコエ）まで車で旅した。その道中の印象をもとに、彼は多くの感動的な詩や童話を残している。この旅には、教え子の就職先を知り合いに斡旋してもらうという用向きがあったというが、当時日本の最北端だった樺太の栄浜まで足を延ばしたのは、前年に最愛の妹を病気で亡くするという受け入れがたい現実と向き合うためであったろう。栄浜までの汽車の旅は、彼のその後の創作活動に大きく作用することになる〔賢治の足取りを詳しく知るには、藤原浩著『宮沢賢治とサハリン』（東方書店、2009 年）を参照のこと〕。

博物館の入り口にサハリンの大きな地図が掲げられている。それは、私たちの見慣れた縦長のサハリン島ではなく、横長に伸びたサハリン島であるが、なんとそこには、宗谷海峡に橋が架けられ、間宮海峡にはトンネルが描かれている。アンドレイは、宗谷海峡の橋は「ファンタジーだ」と笑ったが、トンネルのほうはそうでもないらしい。かつてスターリンはサハリン島と本土をトンネルで結ぶ計画を下し、1953 年には実際に着工したのだったが、その直後にスターリンが死んだために工事は完全にストップした。しかし、ソ連が崩壊して 21 世紀になった今日、今度はトンネルではなく橋でサハリンと本土を結ぶ計画が持ち上がっている。だがそれも、ウクライナ情勢の悪化にともなう経済制裁の影響で、先行きはどうか分からないと、アンドレイは話しながら顔を曇らせた。

北海道からサハリンを通過して大陸まで橋でつながることは、確かにファンタジーかもしれない。だが、樺太への旅行で着想を得てから、稿を重ねて生み出されたといわれる宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』は、私たちにとってかけがえのないファンタジーの贈り物となっている。物語では、ジョバンニとカンパネルラが「ほんとうの幸い」を求めて銀河鉄道の旅に出る。今日私たちは、日本とユーラシア大陸を結ぶ夢の架け橋を渡って「ほんとうの幸い」を求める旅に、どんなファンタジーが描けるだろうか。

あつという間に過ぎてゆくサハリンでの時間を惜しみながら、3 日目の朝に私たちは再び〈アイヌ宗谷〉に乗船した。自転車組やバイクの若者たちの顔も見える。皆何か得るものを得て晴れやかな顔つきをしている。来た時と同じ 5 時間半の船旅を終え、いよいよ船が稚内港に入ったとき、スピーカーから下船の合図を知らせるテーマ曲が流れてきた。稚内の街を歌ったものらしく、1 番はロシア語で、2 番は日本語の歌詞で、同じ女性歌手の声で歌っている。「——ワッカナイ、ワッカナイ。シアワセワケアアッテ…」。

幸せを分け合うこと——それは簡単なようで簡単でない。銀河鉄道の中でジョバンニが葛藤するように、人は他人の幸せを見て嫉妬に苦しむ間は、いわば「幸せ保存の法則」から抜け出せないでいる。モノが化学変化を起こす前と後で質量の総体に変化しないことを「質量保存の法則」というように、時間による変化の前と後で幸せの総体は変化しない、つまり、他人が幸せになればその分自分が不幸になるというものだ。国と国の関係もしかり。領土や領海のように質量をとるものも争点とする場合、どちらかが多くとれば、必ず他方が少なくなる。その中で幸せを分け合うことは、そのような「幸せ保存の法則」に対するオルタナティブを意味している。幸せ分け合って、隣国の幸せを自国の幸せと感ずることができたとき、「ほんとうの幸い」は現実のものとなるだろう。そこに少しでも近づくためには、両者のパイプを太くこそすれ、両者を結ぶ道を閉ざすべきではないはずだ。